京都大学医学部保健学科紀要
健康科学　第1巻　2004

第17回健康科学公開講座　—2—

学童期における子育て
—作業療法の視点—

小　西　紀　一

作業療法は「活動を通して対象者の環境適応を援助する」専門職です。ヒトが生まれてから寿命を全うするまでの期間を通して，個人が持ちうる能力を最大限発揮して環境から要請される課題に対処し，達成感・自尊心を高められるよう支援します。そのために，対象者と環境との関わりを時間，空間の軸に沿って分析し対応策を考案することになります。「学童期における子育て」を作業療法の視点からこのような「活動分析」という手法を用いて説き明かして行こうと思います。

Ⅰ．環境適応に関する作業療法の視点
対象操作機能モデル

環境適応の是非は何で判断するのが妥当でしょうか？　様々な検査を用いて得られる結果としての数値？　客観性は高いかも知れません，しかし当人にその数値を告げたところでその『数値』自体が何をどうすべきかを教えてくれるものでない場合が多いでしょう。それよりも実際に課題に対応しているときの「作業活動」が確かに自らの欲求を満たす結果をもたらしてくれるということを体験するとしたらどうでしょうか？　自らの身体で，五感を通して具体的に確認することが出来るのではないでしょうか？

このように現象として捉えやすい適応反応を分析する視点の一つとして「対象操作機能モデル」の紹介をさせて頂き，そのモデルを用いて学童期における子どもの特性，その特性を把握した上で効果的に子育てを進めるために留意すべき諸点を紹介します。

1．対象操作機能モデル

作業療法士であり，教育学博士でもあった米国のAyres, A.J. は人間が対応すべき環境を『物理的環境と社会文化的環境』に大別し，それらの環境と効果的な相互関係，相互作用を遂行するための道具として『行為機能（Praxis）と言語機能（Verval function）』を挙げています。行為機能とは『なじみのない状況において適応反応を実施するために新たな運動プランを作り出す機能』であると説明しています。例えば，初めて竹馬を目の前にしたとき「うん？あそこに足をおいて，竹を手で支えれば歩けるんじゃないだろうか？」という運動プランの概括的なイメージを持ち（観念化の段階），「そのように操作するためにはまず，両手で竹馬を支えて，次に片足ずつ足台に乗せて……」という具体的な身体の使い方をイメージし（順序立ての段階），「よし，試してみよう」と取り組みが始まります（遂行の段階）。こうして試行錯誤を繰り返すなかで順序立てや遂行の内容が調整され最終的にうまく乗りこなせる状態になります。また，その運動プランをある程度繰り返し用い，成功率が高くなると自動的に遂行される運動へと転化していきます（熟練した技能＝かまえ）。

Ayresは，この行為機能の中枢は言語機能の中枢と密接な関係があると推定しています。すなわち，行為機能と言語機能はお互いに影響を及ぼしあうものであることを示唆しているのです。子育てを考える上で大切な考えになると言えるでしょう。

この二つの機能を織り込んで，環境への適応能力の発達を整理していくために仮説として創り出したのが「対象操作機能モデル」であります。

◎対象操作機能の発達的変遷

1）直接的対象操作の段階：身体の一部を媒介として，直接操作対象とコンタクトをもちつつ操作する段階。例）かゆいところに手をのばし掴く，ガラガラに手をのばし掴む。

2）準間接的対象操作の段階：道具（hand tool）を媒介として対象を操作する段階。例）櫛で髪をとかす，お箸で食物をはさみ口まで運ぶ。

3）間接的対象操作の段階：コトバや身振りを媒介として，空間を隔てた対象を操作する段階。例）「ママ，のど渇いた」と訴えることで手の届かないところにあったジュースの缶が手元に運ばれてくる。

4）超間接的対象操作の段階：コトバを媒介として，時空間の制約を超えたものを対象として操作する段階。例）抽象的思考，家に電話してみたい番組の録画予約を依頼する。

◎対象操作に関連する言語機能の発達的変遷

1）感覚-運動レベルにおける発声：因果関係の結果としての発声，原因となる具体的な感覚刺激の存在を必要とする。

2）知覚-運動レベルにおける発声：因果関係を理

京都大学医学部保健学科作業療法学専攻
〒606-8507 京都市左京区聖護院川原町53
受稿日　2004年9月17日

解し，その結果をもたらすために発声する～対象操作機能が備わり始める，発声のきっかけとなる具体的な感覚刺激の存在を必要とする。

3）認識-運動レベルおける発声：発語に対象操作機能が確立される，発声のきっかけとしての具体的な感覚刺激の存在を必要としない。

2．学童期における対象操作機能の特性

学童期における子どもの対象操作機能の特性は，

1）準間接的対象操作機能の確立期；文房具の適切な使用，遊具の使いこなし，球技等，道具を使っての遊び。

2）間接的対象操作機能の試行錯誤期：友人との交流を通じ，コトバの対象操作機能を駆使する機会が増大。適切な表現方法を積極的に吸収，親の立場からすると「どこでそんなコトバを覚えてきたの？」と思わされることがある。

3）超間接的対象操作機能の萌芽期：小学校中学年から高学年にかけて「理屈」ぽくなってくる。「理想」を語り合う友人の存在が家族より優先されるような場合もある。

Ⅱ．コトバだけでなく，活動を通した子育て

達成感を伴う活動は子ども達に自尊心をもたらし，さらに上のレベルの課題に挑戦していこうとする意欲を向上させてくれるものです。自発的に向上を目指して子どもが活動している姿こそ理想的な子育てといえるでしょう。しかし，経験不足で技能的にも未熟さを持つ子どもに対して，人生の先輩としてつい口を挟む頻度が多くなってしまうのも事実であります。作業療法士が現場で対象者に対し心がけていることに「援助は最小限度に，効果は最大限に」というモットーがあります。

環境への関わりにおいて適応反応がうまく作り出せるように援助するときのポイントについて提案します。

ある側面において，子どもは『行為機能，言語機能』の成熟と共に育つといえるとすれば，実際の活動場面において自主的，自律的に取り組む機会を多く体験させてあげたいものです。目的が達成されたとしてもその過程で大人の介入が多いと自分でまかなったという感想が持てないだけでなく，身体で，五感で学ぶ内容も貧弱なもので終わる結果となるでしょう。

1）最小限の援助：身体を使いこなす時に，ポイントになるのは「重力」。重力に抗して運動を遂行するときに脳は「支持面・重心線」を計算し協調した運動を創り出す。その場面で最も重要な支持面・支持点を保証し，あとは自由に動かせるように援助のしかたを工夫する。

2）失敗を失敗で終わらせない。結果が失敗であっても，そこに至る過程の中でうまくできている部分はあるはず。まず，その部分に対して整理し，改善すべきポイントを絞った上で適切なアドバイスを提供する。或いは，失敗したこと自体を「そんなやりかたもあるんだね，すごいね。もう一度やってみせて」と違った価値観から評価する。価値観の多様性に対しての気づきを促すとともに，『それでいいのなら，またやれるぞ』と意欲・動機を損なわずにチャレンジする姿勢を維持できる可能性が高くなる。

3）内的欲求の充足を保証。欲求充足があらばこそ，チャレンジへの動機が高まります。

a）生理学的欲求：生理学的に快である反応をもたらす刺激。汗をかいて戻ってきて，冷たいジュースを飲んで癒された。お父さんに高い高いをして遊んでもらった。

b）生物学的欲求：自己の身体能力を発揮し達成されることから得られる満足感。「ママ，今日体操の時間に逆上がりができるようになったよ!」

c）心理学的欲求：弟の面倒をみてあげたことで，大好きなお母さんから褒められた。

算数のテストで頑張って90店とれた。

具体的な対応策については，子どもひとりひとりの個性に合わせて創意工夫が必要ですが，以上紹介した内容を一つの指針として活用して頂くことで「子育て」への取り組み姿勢にバリエーションがもたらされることを期待しています。